



Title	What Maisie Knew にみる Maisie の成長と Self-Effacement の問題
Author(s)	中村, 嘉男
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1990, 31(1), p.65-76
Issue Date	1990-07
URL	http://hdl.handle.net/10069/15272
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-23T12:58:03Z

What Maisie Knew にみる Maisie の成長と Self-Effacement の問題

中 村 嘉 男

The Problem of Maisie's Growth and Self-Effacement in *What Maisie Knew*

Yoshio NAKAMURA

I

What Maisie Knew を論じて Maisie の成長について語るのは避けられないことかもしれない。だが、それについて語る時、なぜ研究者たちは一様に彼女の independence を強調したがるのであろうか。彼らの論文を読んでいくと、自立の達成度が成長を計る物差しになるという考えが彼らにとっていかに抜き難い固定観念となっているかがよく分かってくる。例えば Paul B. Armstrong は、“‘What Maisie knew’ is that she holds her existence in her own hands and that she must not follow Sir Claude in trying to avoid that burden.”¹ と述べ、Maisie の独り立ちを強調している。また Thomas L. Jeffers は、“Writing her story herself, she has the support of doing so within the moral language of culture, yet the pen is decidedly in her own fingers”² とやはり彼女の自立性を主張する。また John Snyder も、Maisie の知が “her capacity to feel and affirm . . . the priority of passion”³ から生まれていると述べ、彼女が自分の主体性をしっかりもち始めたことを重視している。さらに J. F. Blackall は、Maisie が周囲の大人から独立していく過程を丹念に辿りながら、彼女が Boulogne に来てしばらくして “the period of moral debate which is to terminate in her rejecting each in turn of her adult

companions in favor of an independent passion shared with none of them”⁴が始まると考えている。以上四人の研究者とは大きく論点を異にして、作品の“the impossibility of reading”を主張する J. Hillis Miller は、“What I learn from *Maisie* is that I am eternally alone when I must decide, as alone as Maisie when Sir Claude tells her she must decide herself, that it all depends on a word from her”⁵と述べ、最終的な決断をするとき独立した主体が拠り所になると結論付けている。かくして、*Maisie* の成長に肯定的な研究者はほとんど一様に彼女の independence を強調し、Miller のように意味を読みとることの不可能性を主張する批評家も、孤独な主体の決断という意味だけは肯定している。

このような批評傾向に逆らって、この論文では、*Maisie* の主体性の確立よりむしろ消滅の方が彼女の心の成長を一層強く納得させてくれることを明らかにしてみたい。成熟が、independence の確立による自我の充実よりむしろその消滅によってもたらされるという考えは、西欧の個人主義の伝統の下に育った人には分かりにくいかもしれない。他力本願的とも言えるそのような成熟の仕方は、しかし、James の作品によく見うられ、周知の resignation のテーマにも繋っている。Isabel や Milly のように *Maisie* もまた、周囲への顧慮の大きさによって虚ろとなった内部が自己の主体の確立など些事に思わせるような成長を遂げる。もちろん、彼女の主体性は彼女が大きくなるにつれしっかりしてくるが、それに伴ってその主体が周囲の関係の中に自らを消去する仕方も成長するのだ。そのような主体の他力本願的な関係の仕方についての考察が今まで不十分であったと思えるのである。このような観点から、*Maisie* の成長について考えてみたい。

II

What Maisie Knew で一番目立つ構成要素は、何と言っても対称性と対照性であろう。*Maisie* の離婚した父 Beale Farange と母 Ida は共に救い難いエゴイストであり、二人共ほどなく別の相手と再婚するが、またすぐに双方共浮気相手を探し求める。その間に、それぞれの再婚相手 Sir Claude と Mrs. Beale が *Maisie* を仲立ちとして親しくなり、外で遊び回る実の親に代って彼女の実質的な保護者となる。また *Maisie* の最初の家庭教師で後に Mrs. Beale となる

Miss Overmore の美貌にこりた Ida が二番目に雇う Mrs. Wix は、色恋沙汰の心配をする必要がないほど性的魅力のない中年女性だが、その分だけ Maisie にはやさしい。もっとも、実の親より親切な義理の親や Mrs. Wix も、Maisie を自分たちの都合のよいように利用する点では皆同じである。

このような大人たちに囲まれて、Maisie はただ一人、彼らとの対称性または対照性の図式に収まらない言動を示し始める。言わば彼女は、彼女の周囲の大人たちが思いも及ばないような他者性を示し始めるのだ。それが最初に見られるのは、彼女が別れた父と母の許に半年ごとに交代で引きとられていたときである。彼女は、一方の親から悪意に満ちた伝言を最初のうちその意味が分からずにそのまま伝えていたが、それが他方をいつも怒らせることに気づいて、わざと忘れたふりをするようになるのだ。憎しみ合う双親に自分がそれぞれの憎しみを伝える道具にされていたことに気づいて彼女は、もう二人から利用されまいと決意し、馬鹿を装うのである。

Her lips locked themselves with the determination to be employed no longer. She would forget everything, she would repeat nothing, and when, as a tribute to the successful application of her system, she began to be called a little idiot, she tasted a pleasure new and keen.⁶

まだ物心がつくつかつかないかの年で、すでに Maisie は、自分を捨てて周囲の和をはかるといふ、大人にも簡単に真似られないことをやっている。“she would repeat nothing” という決意によって主体性を維持しながら、馬鹿を装うことによってそれは同時に自分を棄てているとも言える。このとき彼女は、自我の檻に閉された両親の致底理解できないところに立っている。言わば彼女は彼らにとって絶対的な他者となっているのだが、その不思議さに親たちは気づくことはないのだ。

いま見たように Maisie は幼くして自分より他人のことを先に考えようとする傾向を強くもっており、他人への配慮が彼女の主体を消去する場面は、以後頻繁に見られる。例えば、母の再婚相手 Sir Claude から父の再婚相手 Mrs. Beale について “Do you think she really cares for you?” と聞かれた Maisie は、“Oh awfully!” と答えるが、さらに彼から、彼女を自分の娘のように可愛がる家庭教師の Mrs. Wix と比べて、“Is she as fond of you, now as Mrs. Wix?”

と尋ねられると、“Oh, I’m not every bit Mrs. Beale has” (pp. 77-8) と絶妙な答え方をする。この意味は、律儀で忠実だが性的魅力のない中年の Mrs. Wix と異なり、まだ若くて美しい Mrs. Beale には Maisie 以外にも Sir Claude のような人と特別親しくなれるということであり、後者が前者ほど自分をかまってくれなくても仕方がないと、自分を棄てて後者をかばう表現にもなっている。幼い少女にどうしてこれほど絶妙な無私の対応ができるのかという不思議さと、Maisie ならこれができて不自然ではないという本当らしさが見事に釣合い、彼女の可愛さがにじみ出ている反応である。

上の例でもわかるように、Maisie は周囲の大人たちの関係の子供らしい鋭敏さで理解している。彼女は、Mrs. Beale と Sir Claude が自分を口実にして会っていることもすぐに感付く。彼女が母の家にいる間は Mrs. Beale に会いに行く口実がないと Sie Claude が嘆くのを聞いて Maisie が思い起こすのは、“how much Mrs. Beale had made of her being a good one[pretext], and how, for such a function, it was her fate to be either much depended on or much missed” (pp. 79-80) という事だった。しかし Maisie が素晴らしいのは、彼女がこのために彼らを嫌ったり恨んだりしないことである。普通の子ならこのようなとき自分をみじめに感じるだろうが、それは自分にどうしても執着してしまうからだ。自分を捨てるという行為は、愛する人のために自然に行えることはあっても、普通には至難の技であり、凡人には往々理解できない奇異な動きにしかみえない。特に Mr. Farange のようなエゴイストには、自己執着から解放された娘の言動は非人間的な怪物性にしかみえない。Mr. Farange は、残酷にも娘に対して、彼の二番目の妻と Sir Claude が彼女を口実にして逢引きしていると告げ、“You’re a jolly good pretext . . . for their game” (p. 189) と言う。これに対して Maisie は、“Well then that’s all the more reasons . . . For their being kind to me” と答える。これを聞いて Mr. Farange はあきれはて、彼女を“a monster” と呼び、自分のいいかげん極まりない行ないを棚に上げ、Sir Claude と自分の妻を非難して“They’ve made one[a monster] of you. Upon honor, it’s awful” と言う。彼ほどのエゴイストでなくても、自分が口実にされ利用されていたことが分かれば嘆き悲しむのが人間らしい反応だと思える人は多いかもしれない。だが Maisie は、嘆きも怒りもせず、大人に不信感を抱いて反抗的になったりもしない。それどころか、利用されていることを逆に生かして Sir Claude や Mrs. Beale との関係を明るく充実したものにしようとするのだ。これはほとんど、我への執着から解放されて自由闊

達に生きる大人たいじんのような振舞と言えよう。信じられないぐらい開かれた生き方であるため、それが我に閉された人に怪物的に見えることは避けられないかもしれない。

興味深いのは、このような行動を Maisie がどこまで意識的にしているかということだ。あるいはどこまでそれは自然なのだろうか。この問いに明確な答えを出すことは恐らく不可能である。作者は Maisie の言動の源を徹底して曖昧なままにしているのだ。私たちはただ、意識性か自然性のどちらがまさっているか推測しながらテキストを味わっていただけだ。そうすることによって Maisie の魅力が、“nature”に偏っても“art”に偏っても損なわれてしまうということが分かってくるのである。

言わば Maisie の魅力的な振舞は“nature”と“art”の間にあるが、その代表的なものの一つに、彼女が幼い頃から身につけた生の観察者になる習慣がある。これは、目の前で起きていることを一歩離れて見守るという態度で、利己的な親に振り回されていた彼女が身につけざるをえなかった習癖だ。これによれば、自分自身でさえ劇の登場人物であるかのように考えることができ、つらい人生も耐えやすくなり、生への執着からも解放されやすくなる。周知の通り、これは James が *Autobiography* で明らかにした彼自身の子供時代の生活態度でもある。この態度について James はその特徴を“gape”という言葉で表現しているが、この動詞は、見るという行為によって生から離れながら、見とれることによってそれに巻きこまれる James 的な生き方をよく表している。Maisie もまた、一歩離れて生の観察者となる不自然さに陥りながら、そこから自然に、あるいは意識的に出ていって生に関わる積極性をもち続ける。

例えば、Sir Claude を Mrs. Beale にとられたくないという思いにかられた Mrs. Wix が、Sir Claude に対し自分と Maisie を生の拠り所にするよう熱弁を振ったときも、Maisie は思わず一歩離れた観察者になってしまう。“Take hold of us — take hold of her [Maisie]. Make her your duty — make her your life: she'll repay you a thousandfold!” (p. 106) と熱烈に訴える Mrs. Wix に Maisie は自分が話題にされながら実際は見捨てられていると感じ、“spectatorship”の中に入りこんでしまうのだ。親に見捨てられた少女の養育という道徳的に立派な行ないを口実にして、Sir Claude と暮りたいという我欲を満たそうとする Mrs. Wix の熱弁に Maisie は、幼い頃より身勝手な父と母から味わわれてきた寂しさに似た気持ちを感じたのである。

このような状態から普通の子がとる自然な反応は、周囲の大人に対する拒絶

であろう。だが Maisie は、決してこのような自然の反応をしない。逆に彼女は、大人から口実とされ利用されることによって主体の死を感じながら、それを逆手にとって周囲の和を計り積極的に生きようとする“art”を示すのだ。この Maisie の振舞は、周囲の大人の無理解と自己中心によって一層際立つが、これを彼女と周囲との対照図式で捉えては、彼女という驚異が十分理解できなくなる。彼女と大人たちとの関係は、次に掲げる彼女と Mr. Farange の関係に見られるように、絶対的な非対称になっているのである。

... but if he had an idea at the back of his head she had also one in a recess as deep, and for a time, while they sat together, there was an extraordinary mute passage between her vision of this vision of his, his vision of her vision, and her vision of his vision of her vision. What there was no effective record of indeed was the small strange pathos on the child's part of an innocence so saturated with knowledge and so directed to diplomacy.

(pp. 182-3)

父の考えを娘が読みとり、それを父が読みとり、読みとられたことをさらに娘が読みとるといふ、合わせ鏡の無限に続く映し合いの関係は、対応するものが食い違う非対称になっている。つまり、何が父のためになるかを考える Maisie に対し、Mr. Farange の方はその娘を利用することしか考えていないのだ。具体的に言えば、彼は保護者として自分が立派に振舞ったと世間や娘に思わせて彼女を追い払おうとしていたが、その父のために娘は自分にできることを何とか見つけ出そうとしたのである。その不思議な美しさと哀感を感じとることは、Mr. Farange には最後までできない。

かくして Maisie という存在の驚異は周囲の大人の無理解にさらされ続ける。特に実の父と母は新たに見つけた相手と一緒にいるため、彼女を最終的に捨てようとする。そのため、彼らのそれぞれの配偶者 Sir Claude と Mrs. Beale が結婚できる可能性がでてきて、Maisie の周囲では新たな対立が起り始める。それは、Mrs. Wix が二人の関係の進展を阻止しようとして画策し、Sir Claude に Maisie を連れて外国へ行くよう説得して、彼もそれに従ったからである。彼らのあとから Mrs. Wix と Mrs. Beale が次々にやって来て、対立は最終的な局面を迎えることになる。その間に Maisie が学んだことは、彼女の最大の理解者

である話者でさえ書き留められないというほど深く広い理解の仕方である。言わば Maisie は、作者に近い話者にさえ安易な捉え方を許さない他者に成長するのだ。

III

北仏の Boulogne に連れて来られて Maisie が最初に知ったことは、外国の風物に対して自分がのびやかに接触できるということと、そのような対応ができない小間使いの Susan に差をつけたということである。London では Maisie を子供扱いできた Susan も、Boulogne では状況の変化に対応できず、自分の殻に閉じこもってふさぐだけだった。これに対して Maisie は、閉じこもる我などもたないかのように、のびやかに振舞うのだ。

Maisie の状況への柔軟な対応が一層生かされるのは、もちろん、今まで同様、変化する人間関係においてである。前にも述べたように、北仏で Maisie を取り巻く大人たちの関係は大きく動き始める。それはまず、Mrs. Wix が Boulogne に来て不用となった小間使いの Susan を、Sir Claude が London まで送っていくと言ったとき始まる。彼が London で Mrs. Beale に会うつもりだと見抜いた Mrs. Wix はそれに猛反対するが、Sir Claude は Mrs. Beale から来たばかりの手紙を見せて、何とか彼女の同意を得ようとする。その手紙は、Mr. Farange から Mrs. Beale へ送られたもので、二人の離婚を確定的にする内容をもっていた。この手紙で Mrs. Beale も Sir Claude 同様に離婚できる見通しが立ち、二人の関係も Mrs. Wix が主張するほど immoral ではなくなる。にもかかわらず、あるいはそのために一層 Mrs. Wix が頑固に Mrs. Beale を否定し続けるので、Sir Claude は彼女と自分の立場が同じになったのに、自分を受け入れて彼女を否定するのはなぜかと Mrs. Wix にたずねる。これに Mrs. Wix は彼が仰天するような反応をする。つまり、彼女はなまめいたしなを作り、“a great giggling insinuating naughty slap” を彼に与え、“You wretch — you know why!” (p. 256) と言ったのだ。これに Sir Claude が見せる “the very image of stupefaction” に読者は吹き出してしまいが、彼に同情も禁じえない。Mrs. Wix の愛は、彼女の容貌や年令を考えれば釣合わないグロテスクなものなのだ。だが Mrs. Wix にそのことは自覚できない。そればかりか、彼女はあの救い難く閉ざされた主観性を Maisie にも押しつける。これに対して Maisie が見せる対応

は、今まで以上に大人びており、相変わらず見事な無私性を見せるのである。

その無私性は、Sir Claude が Susan を連れて London へ立ったあと、Maisie が Mrs. Wix と共に登った Boulogne の古い château のある丘から見た聖母像に象徴されている。この像の見えるところにいた老婆から “Adieu mesdames!” とあいさつされてすっかり良い気持ちになった Maisie は、Mrs. Wix に向かって “Why after all should we have to choose between you? Why shouldn't we be four?” (p. 271) と、Sir Claude に Mrs. Beale も加えた四人で暮すことはできないかと心の広い提案をする。これに Mrs. Wix は、それでは彼らの immorality を許すことになるかとあくまで反対し、 “Mrs. Beale's as bad as your father!” と決めつける。これに Maisie は “She's not — she's not!” (p. 276) と悲鳴に近い声をあげて抗議する。このため Mrs. Wix は、Maisie の道徳意識に疑問をもち、 “Haven't you really and truly any moral sense?” (p. 279) となじる。その Mrs. Wix は、ただ Mrs. Beale に対する嫉妬に囚われ、固定された道徳律を盾に我欲を通そうとしているだけなのだ。このような Mrs. Wix には到底理解しえない行為をとるのが Maisie である。それは、Mrs. Wix の自己中心性との対立図式では捉えられない並はずれて優れた特質をもっている。

Maisie はまず、Mrs. Wix から “Has it never occurred to you to be jealous of her [Mrs. Beale]?” (p. 287) と尋ねられたとき、“jealous” が彼女の思ってもみなかった言葉だったが Mrs. Wix を慰めるのに役立つと考え、“Well, yes — since you ask me.” と答え、さらに意を通すため “Lots of times” と付け加える。また、このような答え方が自分を “superficial” に見せることを恐れた彼女は自分の真剣さを信じさせるため、“If I think she [Mrs. Beale] was unkind to him [Sir Claude] — I don't know what I should do!” (p. 288) と言う。これに Mrs. Wix が “I know what I should” と応じたため、遅れをとったと感じた Maisie は負けじと、“Well, I can think of one thing” とやり返し、“what is it then?” と挑む Mrs. Wix に “I'll kill her!” と答える。これに Mrs. Wix はただ涙を流し、“I adore him. I adore him” (p. 289) とつぶやくのみである。

Mrs. Wix の涙は、嫉妬のあまり恋仇を殺したいと思うことが “sincerity” と “moral sense” の証しであることを認めている。断るまでもなく真の moral は、このような閉ざされた selfhood から脱け出さなくては達成できない。それができるのは、自分と周囲にとって一番いいことを瞬間的に、または “spectatorship”

の場から考えて実行する Maisie ただ一人である。その彼女が徐々に理解していくのは、Sir Claude をめぐる勝ち目のない争いから降りようとしないう Mrs. Wix の哀れさである。なりふりかまわず Mrs. Beale に対抗しようとする Mrs. Wix は、滑稽でみっともないが、哀れで痛ましくもある。彼女の敗北が Maisie の目にもはっきりしてくるのは、Mrs. Beale がまぶしいような姿をして Boulogne へやって来てからである。Sir Claude と一緒になれる可能性のためか、ますます美しくなった Mrs. Beale は、Maisie の顔を見るなり、“I’m free!” (p. 290) と叫ぶ。がっかりする Mrs. Wix に彼女は、Maisie の保護者としての自分の優位性を、さりげなく “Dear lady, please attend to my daughter” (p. 296) と言って思い知らせる。また、彼女より少し遅れて Boulogne に戻って来た Sir Claude も、Maisie を外に連れ出して一緒に朝食を食べながら、彼女に Mrs. Wix をおとなしく立ち去らせる方法はないかと尋ねる。どうやら彼は、London で Mrs. Besle と話し合い、Mrs. Wix に去ってもらうことを決めたいらしい。さらに彼は、Mrs. Beale を加えて三人の家庭を南仏でもとうと提案する。

“She is your mother now, Mrs. Beale, . . . and I, in the same way, I’m your father, . . . My idea would be a nice little place — somewhere in the South —” (p. 334)

これは、実の親に見捨てられた少女にとっていかに甘美な家庭のイメージである。Maisie の可愛さがよくわかっている義理の親に育てられるなら、Maisie の今までの苦労もかなり償われよう。ところが、何度も言うように、彼女は自分のことだけを考える子ではない。Sir Claude と一日中町を歩き回りながら、そして一度は彼とこのまま Paris 行きの汽車に乗ってしまおうかとさえ思いながら、彼女が最後に辿りついた結論は、“I’ll let her [Mrs. Wix] go if you . . . If you’ll give up Mrs. Beale” (p. 346) というものだった。

つまり Maisie は、Mrs. Wix かそれとも Mrs. Beale についての Sir Claude のどちらを選ぶかの決断を、自らの主体的決断としないで、Sir Claude にあずけたのだ。いや、正確には Sir Claude 個人というより、Maisie と彼女を取り巻く三人の大人が作りあげた関係にあずけたのだ。この関係の中で Sir Claude が Mrs. Beale から離られないことを Maisie が賢明に見抜いていたのなら、彼女の決断は彼女が Mrs. Wix を見捨てない決意を表していると見なせる。この主体的決断を Maisie は、自分が Sir Claude と Mrs. Beale の側につけば独りになる

Mrs. Wix への同情から固めたと思われるが、そのような主体性を一切もっていないかのように彼女は振舞うのだ。彼女は、感傷も同情も交えないドライな取引であるかのように、自分の条件を Sir Claude に提示したのである。

この Maisie の決論は、彼女をあきらめかけていた Mrs. Wix を喜ばせ、彼女を自分の娘にできると思いこんでいた Mrs. Beale を怒らせる。Mrs. Beale は Maisie の決論が信じられず、その真意を正そうとする。だが Maisie は “will you give him up?” と逆に問い返すのみで、ついに Mrs. Beale は彼女の真意がわからないまま怒りを爆発させる。それに対して “I love Sir Claude — I love him” (p. 359) と繰り返す Maisie は、Mrs. Beale が誤解したように彼女に代わって Sir Claude と一緒に暮すことをねらっていたわけではない。彼女がまず言おうとしたことは、大好きな Sir Claude を自分は諦めるから、Mrs. Beale も私を諦めて下さいということだったと考えられる。彼女の言葉はまた、彼女の切ない気持ちのただ一人の理解者 Sir Claude が彼女をやさしくかばってくれたことへのお礼の言葉でもある。

Maisie は、自分に親切にしてくれる三人の大人のうちでは、やはり Sir Claude が一番好きであったろう。その彼と二人で暮すことを一時は考えながら諦めるのは、Mrs. Beale を嫉妬し憎んでいたからでも、彼女と Sir Claude の関係を否定する moral judgement に従ったからでもない。Maisie は、自分の欲望から離れ、“spectatorship” の立場から見て、自分と周囲にとって一番いいことを行なおうとしたのだと考えられる。その結果が、感情に知性を曇らされていても悪い人ではない Mrs. Wix を独りにできないという道徳的判断となったのではあるまいか。その見事さを Sir Claude はいがみ合う Mrs. Beale と Mrs. Wix の前で、“What do you call that but exquisite?” と賞讃するが、さらにその賛嘆の仕方を作者に近い話者は、“with a relish as intense now as if some lonely work of art or of nature had suddenly been set down among them” (p. 356) と表現している。まさに Maisie の決断は、主体という “nature” と “art” の混合から生まれた絶妙な “art” の作品でありながら、“nature” そのもののような自発性を失っていないのだ。

恐らく、このような自然らしさのために、例えば Donna PrzybyLowicz は、*What Maisie Knew* においては、“The natural attitude predominates”⁸ と述べたのであろう。確かに Maisie の明るい振舞は、しばしば無意識的で自発的である。それは、自然そのものではないかと思えるほど、衰れな健気さや痛ましい努力から解放されてのびやかである。しかし Maisie の言動は、今まで見

てきたように、単に自然と形容したのではすまされないものをもっている。子供らしく没入して生きることを幼い頃より否定された彼女は、生の観察者となる不自然をしばしば強いられながらそれを精一杯自然に生きるよう宿命づけられたのだ。子供らしく状況に身を任せているようで、彼女は、状況の流れを良い方向へ向かわせようという倫理的関わりを常に忘れない。その見事な生き方が集約されているのが、今まで見てきたように、彼女の最後の決断である。そこで彼女は、自分だけの世界から離れて周囲を見回し、自分を関係の中で捉え直して、自分のすべきことできることを考え実行した。しかもそれはあくまで無理なく自然な他力本願的な行動であり、同情を寄せられた Mrs. Wix にさえ心理的負担を一切かけていない。まさにこれゆえに、作者に近い話者が Sir Claude の声を借りて Maisie の決断をほめたたえる声が ecstatic になるのだ。

“I don’t know what to call it . . . whatever it is, it’s the most beautiful thing I’ve ever met — it’s exquisite, it’s sacred.” (p. 354)

だが、どれほど“sacred”でも、Maisie の素晴らしさは我欲に囚われた周囲の大人たちから超越的に存在しているのではない。J. F. Blackall も指摘する通り、驚くべき決断をする日の朝 Maisie は、いつもと同じ様に Mrs. Wix に背中の中のホックをかけてもらったり髪をブラシしてもらったりする。そのように生活の中で助けられて生きることを彼女が避けられないのは、彼女が子供だからというより、それが生の不可欠な条件だからであろう。多くの批評家の主張するように Maisie は周囲の大人たちのいずれにも組しない決断をし、independence を達成するが、同時に彼女は、助け合って生きる関係性の中で独立する我などもないかのように無私に振舞う。その無私性は周囲から超越した我のあらわれではなく、常に周囲と積極的に関わることから生じる我の欠除である。前にも少し触れたように、独立した個人の価値の主張すなわち個人主義に対しては、James は常にある限界を感じていた。そのような個人の限界とそれを超える人間関係を彼は繰り返し描いたのだ。そうして創造された人物のなかで Maisie は、その他力本願的な生き方が子供ゆえに無理なく自然にみえるため、特に成功してると感じられる主人公である。彼女は、Hillis Miller の主張する通り、孤独な決意を行いながら、同時にそれとは逆の事柄の重要性も自覚していた。すなわち、決断するとき自分は決して独りではないということ、それまで築かれた人間関係や、自分のことを多少なりとも心配してくれる人々を頼りにして、自分自身

を空無化できるということ、である。

注

1. Paul B. Armstrong, *The Phenomenology of Henry James* (Chapel Hill and London: University of North Carolina Press, 1983), pp. 28-29.
2. Thomas L. Jeffers, "Maisie's Moral Sense: Finding Out for Herself," *Nineteenth Century Fiction*. 34(1979), 171-172.
3. John Snyder, "James's Girl Huck: *What Maisie Knew*," *American Literary Realism*, 11 (1978), 119.
4. J. F. Blackall, "Moral Geography in *What Maisie Knew*," *University of Toronto Quarterly*, 48 (Winter 1978 / 79), 130-48, rpt. in *Critical Essays on Henry James: The Late Novels*, ed. James W. Gargano (Boston: G. K. Hall & Co., 1987), p. 91.
5. J. Hillis Miller, "Is there an ethics of reading?", A lecture delivered at the 58th general meeting of the English Literary Society of Japan on 18th May 1986, reprinted by Kenkyusha Ltd. Tokyo, p. 21.
6. Henry James, *What Maisie Knew*, New York Edition, Vol. 11 (New York: Charles Scribner's Sons, 1908), p. 15.
この作品からの引用は以後すべてこの版により、本文中に頁数を記す。
7. Henry James, *Autobiography*, ed. F. W. Dupee (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1983), pp. 11-31.
8. Donna PrzybyLowicz, *Desire and Repression* (University of Alabama Press, 1986), p. 31.

(1990年4月27日受理)